



巻 頭 言

耐 雑 草 性 (3)

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 高橋 昌一
東 北 支 部 長

植物生育調節剤適用性試験では、東北地域は寒冷地北部に区分され、南は福島県、北は青森県であり、寒地や寒冷地南部などよりは南北に長い。さくら前線はほぼ1カ月を要して通り過ぎるし、梅雨入りや梅雨明けなどでは、南東北と北東北に分けられる。

加えて、東北地域の中央を南北に走る奥羽山脈により太平洋側は表日本型、日本海側は裏日本型の典型的な気候を表している。表日本は温度の低い偏東風の影響をうけるが、裏日本の夏季は高温になる。冬季は、表日本は乾燥し、積雪は少ないが、裏日本は積雪が多い。

このように、生態環境は北、南、東、西で異なるが、しかしながら、水稻の移植時期はそれほど大きな差異はない。雪解け水を灌漑している地域、移植後の気象変動を比較的大きく受ける地域、標高差などのため、雑草の発消長には、地域間差、年次間差が大きく、そのうえ、長期化するところが多い。

当支部では、東北6県の普及機関の協力をいただいて雑草発生面積や除草剤の使用面積などを調査しているが、発生面積が圧倒的に多いのがノビエであり、次いでホタルイである。

第6回全国直播稲作サミットが、本年8月、福島県内で開催される。東北地域では、直播栽培面積が増加しているという。しかし、普及比率は小さい。担い手の高齢化、後継者不足などのため、より省力化、低コスト化を推進する必要があるが、その一つとして直播栽培が注目されている。直播栽培では、雑草が水稻の発芽に先立ち、あるいはほぼ同時に、または遅れて発生するため、移植栽培に比較して、雑草防除は大変である。雑草制御の成否が直播栽培のカギ

を握っているといっても過言ではなからう。

老人力を発揮すると、第2次大戦中の中学時代（旧制）には、援農や松根掘り、学徒動員などにかりだされたが、食糧増産と人手不足を補うためであつたらう援農作業で田打車による除草を初めて体験した。水田の中を何時間も田打車を押すということは大変な足の気だるさを感じたことが思い出される。手伝ってもらった農家も迷惑であつたらう。四っん這いになって行う手取り除草の体験は就職してからであつた。母などは、手取り除草をする三番くさや止くさ時には非常に疲れている様子であつた。

多くの時間を要し、肉体的にも精神的にも苦痛であつた過酷な水田の除草も、2, 4-P A以来多くの優れた除草剤の出現により解放され、省力化されたことは明白な事実である。平成10年度、東北地域の水田では、全耕作面積で除草剤を1回とちよつと使用した計算になる。

減農薬は環境負荷を軽減する一つの手段である。品種に耐雑草性を付与することは除草剤の散布量を減ずることとなり、環境負荷の減少にもなるが、既述してきたように、その作出は、垂涎的であろうが、容易ではない。

平成11年4月9日の朝日新聞は、乾燥状態、零下の寒さ、塩分に強い植物を遺伝子操作で作りに出すことに農水省国際農研センターと理化学研究所との共同研究で成功したと報じている。ノビエなどにアレロパシーがあり、初期生育が旺盛であるなど耐雑草性のある品種の創出や革新技術の開発も夢ではないのかも知れないが、当分の間は、雑草の生理生態の弱点をつき、水の力などを借り、草種と生育程度に応じ、適した除草剤を適量散布することであろう。